

「ジム、あなたはいい子、よくわたしのいったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまってもらわなくてもいいといっています。ふたりはいまからいいお友だちになればそれでいいんです。ふたりともじょうずにあく手をなさい。」

と、先生はにこにこしながらぼくたちをむかい合えました。ぼくはでもあんまりかっすぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそと、ぶらさげているぼくの手をひっぱりだしてかたくにぎってくれました。ぼくはもうなんといつてこのうれしさをあらわせばいいのかわからないで、ただはずかしくわらうほかありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はにこにこしながらぼくに、

「きのうのぶどうはおいしかったの。」

と問われました。ぼくは顔をまっ赤にして、

「ええ。」

と白状するよりしかたがありませんでした。

「そんならまたあげましょうね。」

そういつて、先生はまっ白なりンネルの着物につつまれた体をまどからのびださせて、ぶどうの一ふさをもぎとつて、まっ白い左の手の上にこなふいたむらさき色のふさをのせて、細長いぎん色のはさみでまん中からぶつりと二つに切つて、ジムとぼくとにくださいました。まっ白い手のひ

らにむらさき色のぶどうのつぶが重なつてのつていたその美しさを、ぼくはいまでもはっきりと思いだすことができます。

ぼくはそのときから前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。

それにしてもぼくの大きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは会えないと知りながら、ぼくはいまでもあの先生がいたらなあと思えます。秋になるといつでもぶどうのふさはむらさき色に色づいて美しくこなをふきますけれども、それをうけた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

(大9・8)